平成１９年２月の解説（府県天気予報）

【２月の天候状況】

上旬は低気圧がしばしば北日本を通過し、北日本や東日本の日本海側では雪や雨の日が多く、東日本の太平洋側や西日本では晴れの日が多くなりました。中旬以降は低気圧が数日周期で日本付近を通過しました。低気圧の通過時は全国的に雨や雪が降り、低気圧の通過後は一時的に冬型の気圧配置となって北日本の日本海側では雪や雨が降りましたが、その他の地方では移動性高気圧に覆われて晴れました。

月を通しての日照時間はほぼ全国的に平年を上回り、特に日本海側の地方と南西諸島では多くの観測地点で平年の 140%以上となりました。降水量は日本海側の地方で平年より少なく、その他の地方では平年並でした。気温は全国的に平年より高く、東日本、西日本では平年より 3℃以上高い観測地点もありました。

【２月の検証結果】

17 時発表の天気予報で「降水の有無」の全国平均の適中率は明日予報で 86%と例年（注）より 4 ポイント高く、明後日予報で 85%と例年より 6 ポイント高くなりました。地域毎の適中率では、明日予報はほぼ全国的に例年より高く、特に東北、北陸、沖縄地方では 6 から 7 ポイント高くなりました。明後日予報もほぼ全国的に例年より高く、特に東海、近畿、沖縄地方では 9 から 10 ポイント高くなりました。明日の最高気温の予報誤差は関東甲信、九州南部、沖縄地方で例年より 0.3℃から 0.4℃小さく、全国平均では例年より 0.2℃小さい 1.5℃でした。また、最低気温の予報誤差は九州南部地方で例年より 0.3℃小さく、全国平均では例年より 0.1℃小さい 1.5℃でした。

（注）例年値は気象庁ＨＰ（予報精度検証）内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

【２月の天気予報から】

関東地方では低気圧が通過した後に、前線や低圧部が本州の南海上に残ると、その影響が複雑で天気予報が難しくなります。一般的には地上で北東の風が吹いて低い雲が発生し易くなりますが、上空の風向きによって天気は大きく変わります。地上で北東の風が吹いていても、上空が北西の風であれば晴れることが多く、南西の風であれば雲が発達し易くなり、時には雨が降ることもあります。

2 月 10 日はその事例の１つでした。2 月 9 日の夕方に発表した明日(10 日)の東京地方

の天気予報は、「晴れ、夕方からくもり」でした。地上では北東の風が続くと予想しましたが、上空では昼過ぎまでは北西の風が吹いて晴れるが、夕方からは南西の風に変わるために曇ると予想したためです。くわえて夜になるとさらにその上空に冷たい空気が流れ込むため大気の状態がやや不安定となって一部の地域でにわか雨が降る可能性があることから、18 時から 24 時までの降水確率を 20%としました。

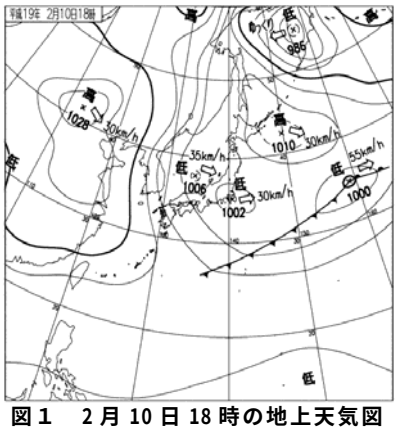

図１　2 月 10 日 18 時の地上天気図

10 日の日中、関東地方の内陸では晴れましたが、沿岸部ではほとんどの所が曇っていました。夕方になって上空の風が南西にかわり、さらに関東地方の南岸には低気圧が発生して東へ進みました。このため広い範囲で雨や雷雨となり、東京地方でも夜は所々で雨が降って都内のアメダス観測所 10 地点のうちの 5 地点で 1mm から 9mm を観測し、羽田では 23 時に雷を観測しました。

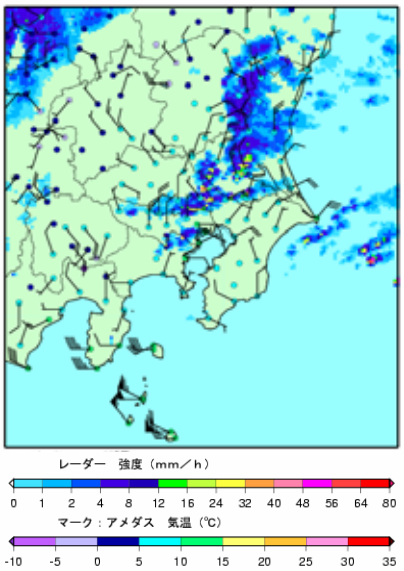

図２　2 月 10 日 22 時の気象レーダーとアメダス観測値(風･気温)

地上や上空の風向は概ね予想通りに推移しましたが、関東地方の南岸に低気圧が発生することは予想していませんでした。このため一部でにわか雨が降る程度の予想に対して、観測地点の半数で雨が降る結果となりました。関東地方の地上で北東の風が吹くときの天気予報は、関東の南海上の低気圧や前線の動向、上空の風の向きや強さ、気温、湿度など様々な条件の違いで現象の程度が大きく変わるため、予報官を悩ませることになります。

【４月の天気予報の利用にあたって】

4 月は日本付近を低気圧と高気圧が交互に通過して、天気が概ね数日の周期で変化することが多くなります。高気圧に覆われれば穏やかな春の天候となりますが、低気圧が発達しながら通過する際には突風が吹いて、雷やひょうを伴う大雨が降るなど荒れた天気となります。さらに低気圧の通過後には、冷たい空気が流れ込んで気温が急激に下がることが多く、山岳地帯では吹雪になることもあります。

うららかな晴天に誘われて、レジャーなどで海や山へ出かける機会も多くなります。天気が急変することもありますので、各地の気象台が発表する最新の天気予報などで天気の変化を確認した上で慎重に行動しましょう。